

巻頭言

2007.4月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

心の知能指数

茗溪塾塾長 宇野 雅春

S 子さんが携帯のメールで、「子と口をきかないようにしよう」とメッセージを送った時、「いじめ」は始まっていました。学校でのトラブルを塾に持ち込もうとしたとき、幸いなことに受け取った側の親が発見して、私に教えてくれました。親の通報がなければ絶対に S 子さんが首謀者とはわからない構造がそこにありました。いじめなどは全く関係なさそうな3人の女生徒が矢面に立つ形でそれは進行しようとしていました。無視するということです。そしてぼそっと嫌みなことを言ったりします。みんなで特殊な目で一人の子をパージしていきます。

悪いことをしたと女生徒達が気がついたときには、いじめられた方の心の傷はふさぎようもなく大きく広がっていて、「仲直り」というような簡単な関係の修復はできなくなっていました。この場合は早く気がついたということで十分とはいえないまでも被害を最小限に抑えることができたと思います。親の通報がなければもっと深刻に進行していったかもしれません。こんなふうにもいつ早期発見できるとは限りません。「いじめ」はケンカとは全く違う物です。子供達はうかつにも気づいていないのですがそれは「犯罪」です。

本当は、謝って済むことではないと思います。学校、地域、親全ての協力が重要と思うようになりました。中には知らず知らずのうちに親や教師が巻き込まれてしまうこともあります。「あの子も悪い」みたいなことで「いじめ」を正当化することはそれに荷担することになります。これが思ったよりも難しいことです。忙しい生活の中で、大人といえども正当な判断ができないことが多いからです。

最近、欧米での EQ (心の知能指数) についての研究発表が注目を集めています。今までの学力に偏った知能指数 (IQ) の考え方に対して、適切な人間関係をつくれる能力や高度なコミュニケーション能力が重視されてきているということです。アメリカでは IQ よりもこの EQ が重視されつつあるそうです。日本の企業の採用担当者もコミュニケーション能力を評価の第1位にあげています。人を説得し、人を引きつけ一緒に働くことをうれしいと思える能力です。この EQ の考え方は、優れた人を IQ より正確に予測できるといいます。ダニエル・ゴールマンという人は著書「心の知能指数」の中で、怒りを感じる時脳の前頭葉によって理性がハイジャックされると、自分を押さえきれなくなると書いてあります。筋道を立ててものを考えたり感情をコントロールする前頭葉が大人になるにつれて発達することで、大人の方が子供よりは自分を押さえられるようになるということなのです。ダニエル・ゴールマンはこの心の知能指数は学習で高められるといっています。

現在は、欧米の学校教育現場でも実際に様々な試みがなされています。日本でも画期的な実践をしている教師の例も聞いたことがあります。

感情をコントロールする力は子供達同士の相互理解から生まれてきます。子供達の未来を考えたとき、この心の知能指数のレベルアップは不可欠のように思います。

「やる気づくりプログラム」は EQ の考え方に近いものです。塾でなぜ必要かという EQ が高いほど、学習能力もアップするからです。私たちがいつも感じていた「受験は心の勝負」ということなのです。「心」も学習で高められるという研究は「未来を作る学習体験」という私たちのスローガンに大きく関わってくる事だと思えます。